道西日本海(奥尻島以南) スケトウダラ資源調査結果

道総研

2026年10月30日

北海道立総合研究機構　函館水産試験場（0138-83-2893）

〇2026年10月20日～26日に，試験調査船金星丸を用いてスケトウダラを対象にした計量魚探調査，トロール調査，CTDによる環境調査を実施したので，結果をお知らせします（図１）。
調査結果は下記の函館水試ホームページからもご覧になれます。

http://www.hro.or.jp/list/fisheries/research/hakodate/

- スケトウダラ魚群は，奥尻海峡を中心に分布した。
- 檜山以南(奥尻～松前沖)における魚探反応量は，前年の 0.78 倍であった。
- 魚体は尾叉長 20～50 ㎝台の範囲で幅広く漁獲された
- 漁場周辺の水温は，スケトウダラが分布する水深 300～500m は平年より 0.3～1.0℃高く，水深 200m 以浅では 1～5℃程度高かった。

● スケトウダラ魚群の水平分布と鉛直分布

・水平分布（図２）：スケトウダラは奥尻海峡周辺の沿岸から沖合にかけて広く分布していた。スケトウダラ漁場域でまとまった分布は確認されなかった。

・鉛直分布（図３）：スケトウダラ魚群は，主に水深300～550mに分布が見られた。

● 計量魚探によるスケトウダラ魚群の魚探反応量

計量魚探調査から推定されたスケトウダラ魚群の魚探反応量は，檜山以南（奥尻～松前沖）では前年比約0.78倍と減少した（図４）が，最近10年の中では中程度であった。海域別に見ると，例年魚群のみられる奥尻海峡周辺では前年比0.64倍，奥尻海脚では前年比0.56倍，松前小島周辺は前年比0.59倍となった。（図２）。

● トロール調査で漁獲したスケトウダラの大きさ

岩内堆，相沼沖，奥尻海脚でトロール調査を実施した。岩内堆では33-34cm，38-39cm，42-45cmにモードが見られた。相沼沖では20cm台から50cm台まで採集された。奥尻海脚では25～30cm台を主体に45cm前後も採集された（図５左側）。なお，相沼沖および奥尻海脚では採集尾数が少なく，本来の組成を反映していない可能性がある。また，奥尻海峡では2年連続で標本を採集できなかった。

● 水温環境

スケトウダラ漁場周辺の乙部沖，江差沖，上ノ国南沖で水温の観測を実施した（図６）。各調査点ともスケトウダラが分布する300～500m層の水温は平年よりも0.3～1.0℃高かった。海面～水深200mの水温は平年より1～5℃高く，前年より3～12℃高かった。また，乙部沖の水深500mの水温は1991年以降の36年間で最も高かった。なお，10月上旬に実施した日本海定期海洋観測では檜山沿岸の50m層水温が平年より低かったことから，50m層においては短期間で水温が上昇したと考えられる。

※本調査は水産資源調査・評価推進委託事業により実施した

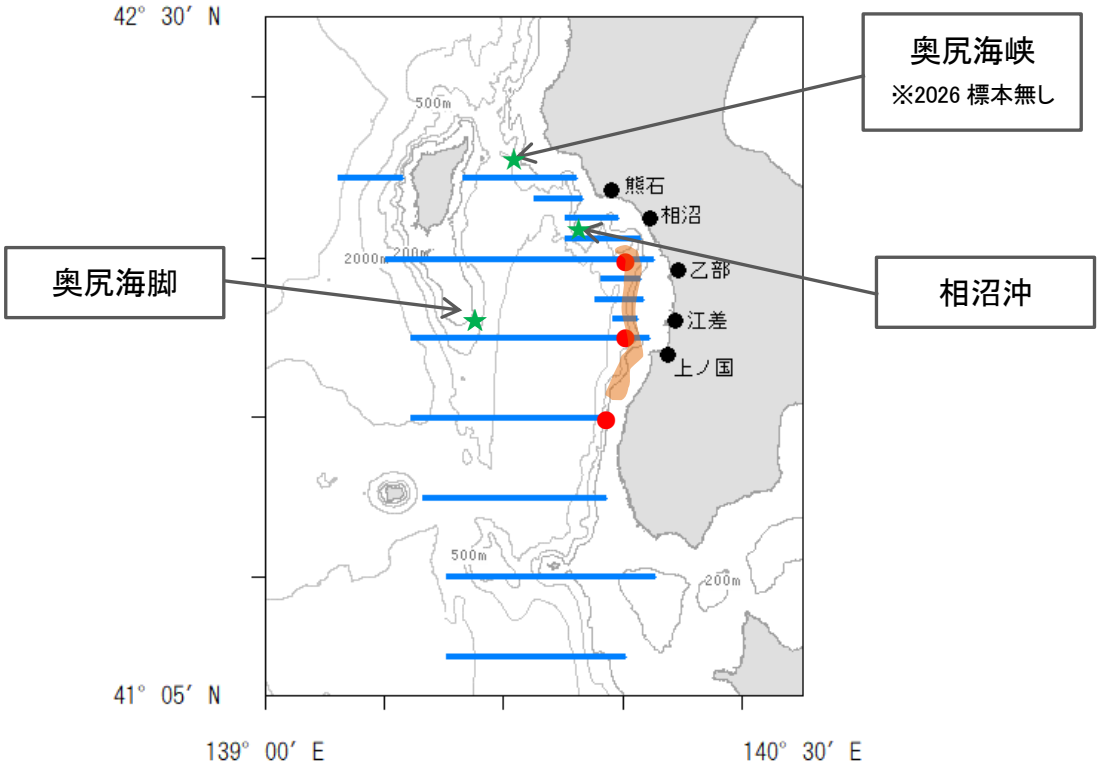


図１　計量魚探の調査ライン（ ━ ）

：スケトウダラ漁場域

★：トロール調査点(上から，奥尻海峡，相沼沖，奥尻海脚)

●：海洋観測点(上から，乙部沖，江差沖，上ノ国南沖)

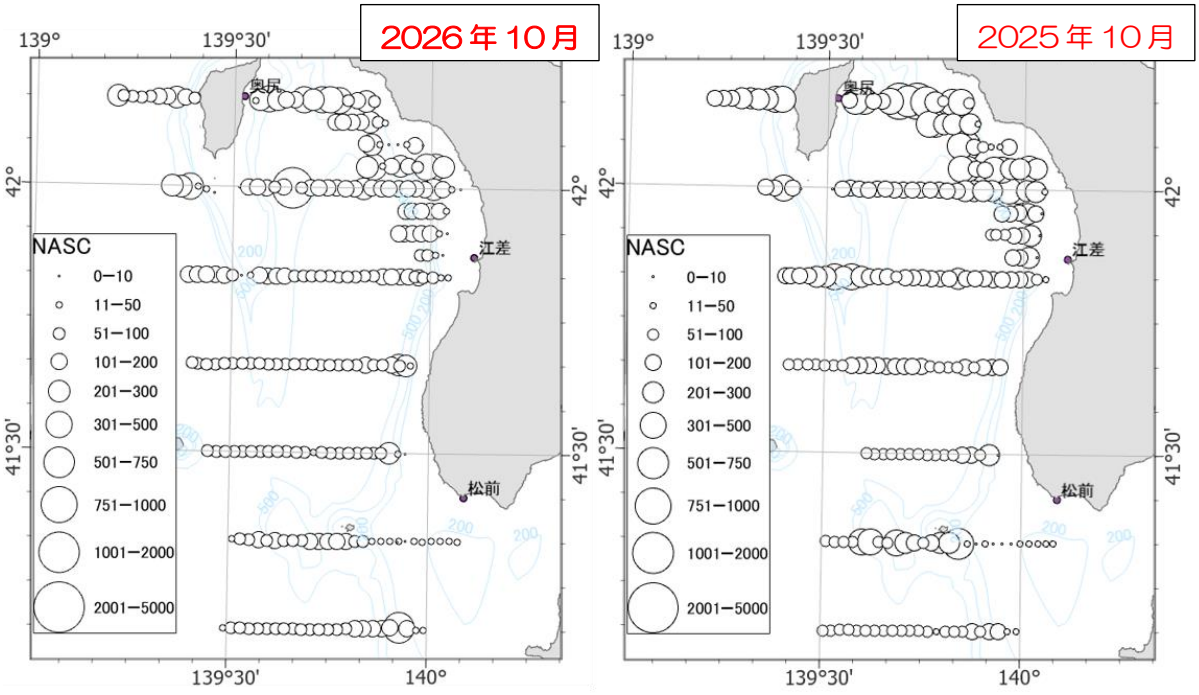


図２　スケトウダラ魚探反応量の水平分布（左：2026 年 10 月，右：2025 年 10 月）

※魚探反応量(NASC)：1 マイル平方面積あたりの魚探反応の強さを表す。

〇の大きさが魚群反応量の強さを示す。

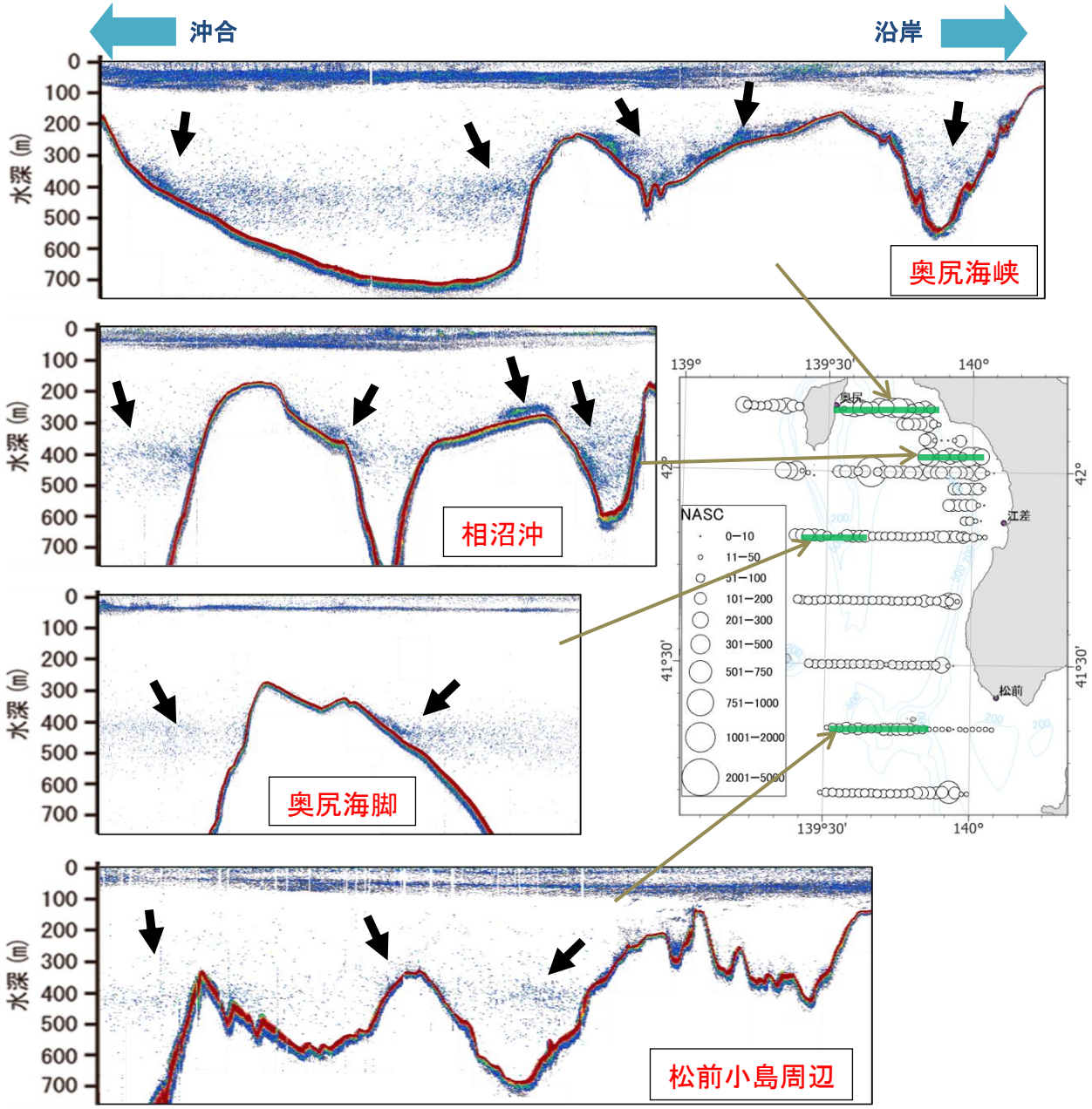


図３　各調査ラインにおける魚群の鉛直分布（夜間に調査を実施）（2026 年 10 月）
※矢印はスケトウダラと考えられる反応、水深 100m 以浅はイワシ類とみられる反応

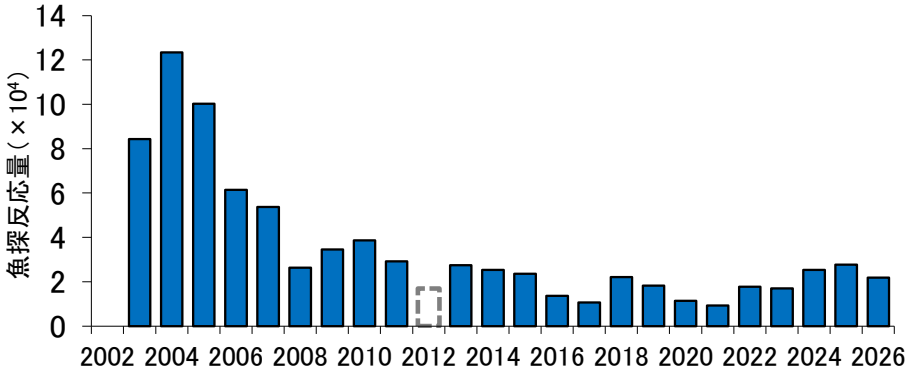


図４　計量魚探調査によるスケトウダラ魚探反応量の推移
※2012 年は荒天による欠測等により過小評価されているため参考値

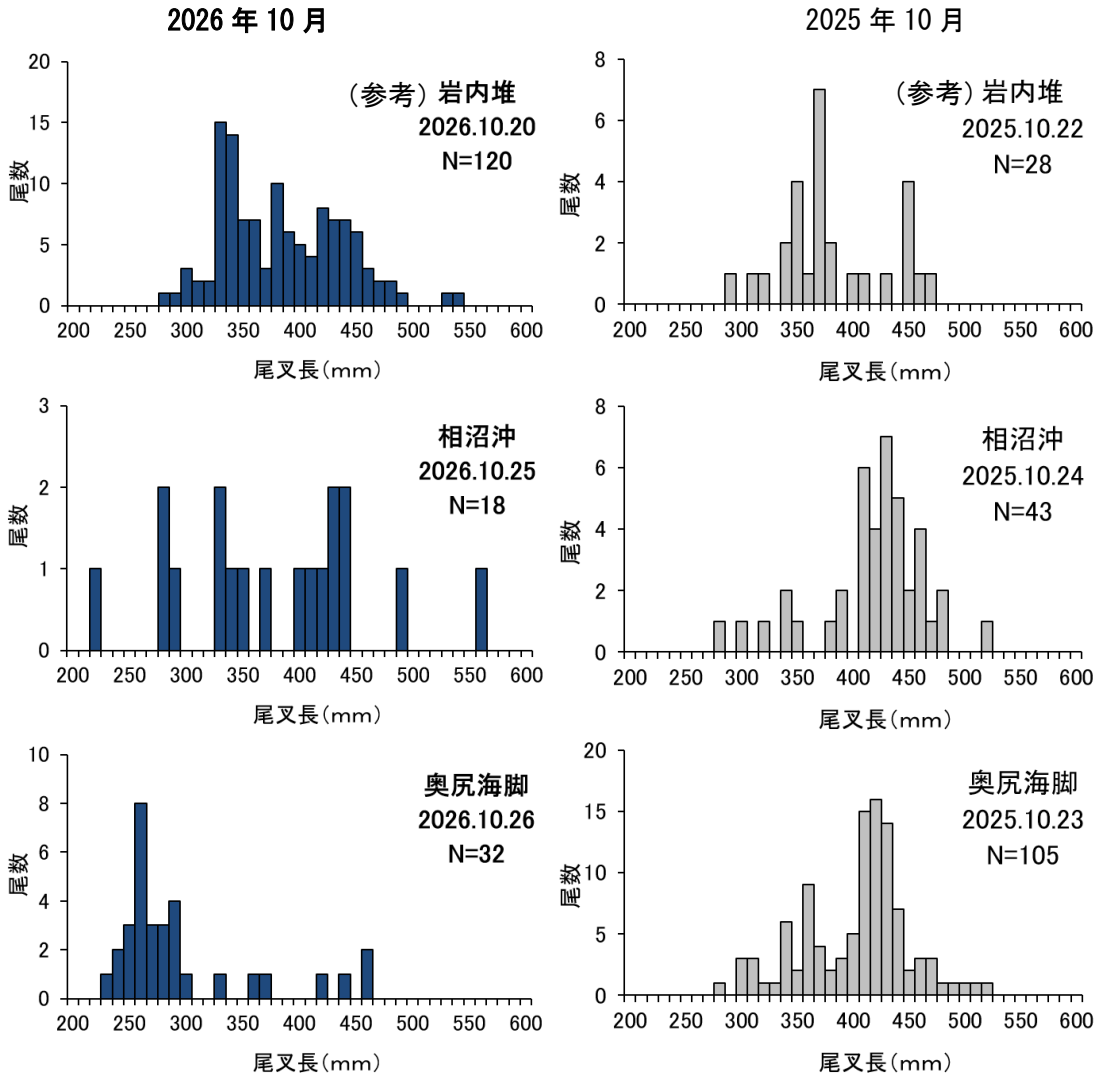


図５　着底トロールで漁獲したスケトウダラの尾叉長組成（左：2026 年，右：2025 年）
※両年とも奥尻海峡の標本が得られなかったため、参考のため岩内堆の標本を示した

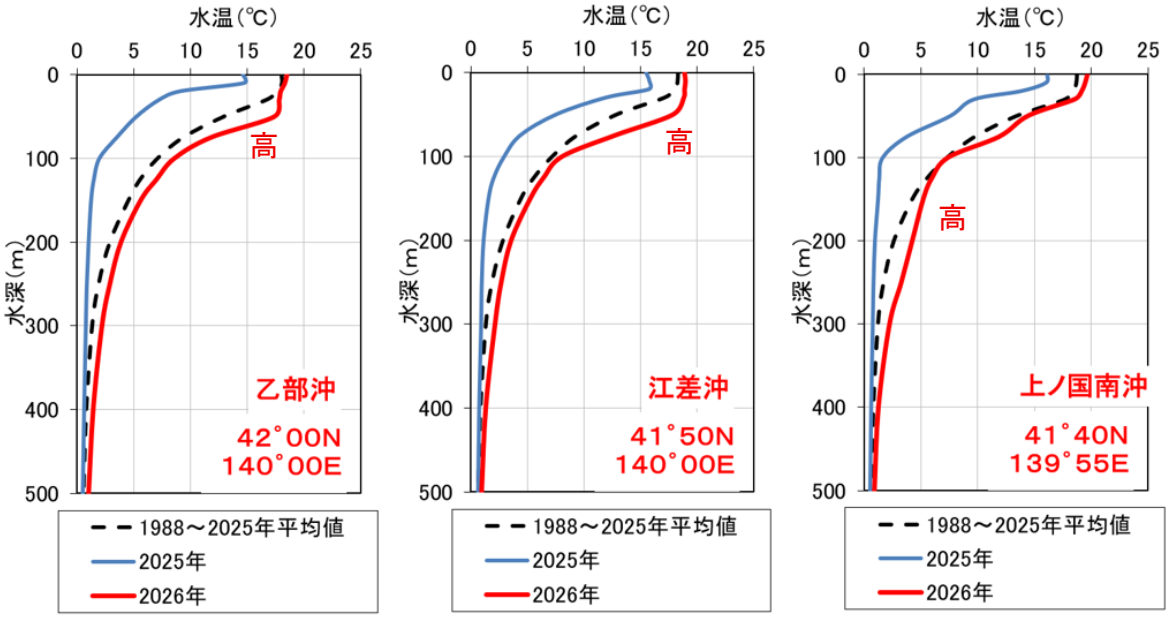


図６　スケトウダラ漁場周辺（図 1）の鉛直水温分布（10 月中旬）